

混合病棟における小児看護

◆ 特集にあたって ◆

子どもと家族に優しい混合病棟を目指して

2016(平成28)年度の小児看護学会教育委員の企画において、「小児看護の実践能力を高める教育」というテーマで混合病棟における教育支援の実際について話す機会を得ました。その際、小児専門病院や大学病院の小児病棟における教育の実際を聞いたことで、今まで感じてきた混合病棟の課題について、より深く考えるようになりました。また、全国の混合病棟で働く看護師や教員と話す機会をもらい、さまざまな要因で困っている現状も知りました。筆者自身、総合病院小児科病棟での勤務を経て、10年以上混合病棟で働いてきたなかでさまざまな困難がありました。全国の混合病棟で働く多くの看護師も似た状況であることに勇気づけられたと同時に、「混合病棟を有する病院における小児看護について、もっと検討していかなければならない」と強く思うようになりました。

実際に研究調査はしていませんが、多くの人々と話すなかで、混合病棟における特性や看護師の困難感において、昔も今も変わらない点が多いのではないかと感じます。しかし、進歩し続ける医療において高度な知識や看護実践能力が求められるなか、院内の教育システムやチーム医療として多職種との連携、それらを統括する管理的視点など、さまざまな新たな要因も検討していかなければなりません。

また小児看護における卒後教育について検討するなかで、基礎教育との連携が十分にできていないことも感じていました。多くの混合病棟の新人看護師は、成人看護を中心とした院内の集合研修を受け、小児看護については学校で受けた教育と病棟独自の教育体制で

育てられるのが現状です。病棟によっては、小児患者が少なく小児看護教育に時間が割けず、基礎教育で学んだことだけですぐに現場対応しなければならない場合もあるようです。部署異動してきた小児看護未経験者も同様に、「今までの経験が通用しない」「小児看護においては新人と一緒に扱いを受ける」という状況に苦勞を感じている人も多いようです。

混合病棟で働いている看護師が実践や教育を行うなかでの工夫や困難、それを支援する管理者の実際、混合病棟に入院する子どもにかかわる他職種の声、看護師を育てる教育機関の立場の視点などを紹介することで、混合病棟で働きながら小児看護に悩む多くの人々の力と勇気につながればと思います。また、小児専門病院や総合病院小児科病棟で働く人々、小児看護教育に携わるすべての人々にとっても、新たな教育支援につながるきっかけになることを期待します。そして、子どもと家族に優しい混合病棟と、それを支える関連職種の支援について、これからも皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

本特集では多くの皆様に協力していただきながら、混合病棟に関するたくさんの思いを一つの形にすることができました。掲載に至らずとも、お話を聞かせていただいた方、快く協力を表明してくださった方など、すべての皆様にこの場をお借りして感謝いたします。

武蔵野赤十字病院看護部／小児看護専門看護師

尾高大輔 Odaka Daisuke